慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大正デモクラシーと青年華族 : 三島通陽と劇団「友達座」を中心に
Sub Title	Taisho Democracy and younger members of the Nobility: viscount
	Mishima Michiharu and the Tomodachi-za theatre company
Author	内藤, 一成(Naito, Kazunari)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication	2012
year	
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese
	studies). Vol.29, (2012.), p.205- 240
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集:大正期再考
	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara
	_id=AN10005325-20120000-0205

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集 大正期再考

大正デモクラシーと青年華族資料紹介

――三島通陽と劇団「友達座」を中心に――

藤一成

内

はじめに

ざまな社会運動団体が誕生し、新聞や雑誌には時代を謳歌する論調があふれた。伊藤隆の言葉を借りれば、 の構築などに代表され、国内では本格的政党時代の幕開けを告げる原敬内閣が成立、東大新人会をはじめさま デモクラシー的潮流の頂点は一九一八、一九年頃で、世界史的には第一次世界大戦の終結、ヴェルサイユ体制 世界を中心に、社会・文化の分野にまで顕著に現れた民主主義的・自由主義的傾向」と定義づけられている。 ドとして広く定着しているといってよい。『国史大辞典』によれば、「日露戦争後から大正末年にかけ、政治の 「大正デモクラシー」という語はよく知られるように後世の造語であるが、時代を象徴する一種のキーワー

義」やら「無政府主義」やら「民族解放」やらの「言葉」となって人びとを興奮させた。そのためにさまざま ができるであろうと人びとに思わせるものをもっていた。そしてその変化を予感する雰囲気は「改造」やら 「革命」やら「解放」やら、あるいはまた「デモクラシー」やら「社会政策」やら「社会主義」やら「共産主

「大正八年前後は熱狂の時代であった。たしかに日本は変りつつあったし、また変らねばならぬし、変ること

しての伯爵有馬頼寧や公爵近衛文麿であり、「新しき村」を創設した武者小路実篤であった。彼らはたしかに り組み、さらには白樺派に代表される文学者の言説などを通じて論じられてきた。その代表が「革新華族」と な階層の人びとがさまざまな組織を作った」というものであった。 華族に対するデモクラシーの影響は、従来、護憲運動や貴族院改革といった政治史的分析、社会事業への取

さえ、一五歳と二八歳である。個々の認識を単純に年齢で区分することはできないが、少なくとも彼らに対す モクラシー開始期の一九○六年においてすでに二二歳、一九一九年には三五歳に達している。最年少の近衛で 華族とデモクラシーを考えるうえで重要な人物であるが、最年長の有馬の場合、『国史大辞典』にいう大正デ

出したいという希求に根ざしていた。 シー状況への反応は、何より革命への恐怖であり、革新的行動の動機は革命の惨禍から自己と周囲の人々を救 るデモクラシーの影響は成人後が中心であることは確かである。それせいもあってか、有馬の場合、デモクラ

麿・実吉捷郎ら学習院の友人とメーテルリンクをはじめとした演劇に熱中した。彼らの劇団「友達座」は一九 モクラシーとともに成長した世代といってよい。三島は、幼少期より文学、芸術に親しみ、土方与志・近衛秀 捧げたことで知られる三島は一八九七年生まれで、一九〇六年には九歳、一九一九年には二二歳と、まさにデ これに対し本稿で注目するのが子爵三島通陽である。我が国における少年団、ボーイスカウト運動に生涯を

岩村和雄などがあり、 音楽学者の加藤成之、 な顔ぶれであった。演出家、 と評価したように、近代演劇史上に無視できない位置を占めている。 五九年)が、「ともだち座 なくされている。友達座は、 て、それもカオスの形で存在していたのである。 田雨雀・与謝野晶子など錚々たる人物がいた。まさに友達座はデモクラシーにふさわしい顔ぶれと活動をもっ 「タンタジールの死」を好演したこと、後の築地小劇場を胚胎せしめた点等において注目さるべきものだった_ t 八年頃発足し、 活動が興隆期に差しかかろうとした一九一九年に突然、 周囲の関係者を見渡しても小山内薫・山田耕筰 フレスコ画家として知られる長谷川路可 (一九一八年) は土方与志を中心とした学習院系の研究劇団で、 音楽家としてそれぞれ名をなした土方・近衛のほかにも、 現在ではあまり知られていないが、河竹繁俊『日本演劇全史』(岩波書店、 (龍三)、 演劇面にもまして興味深いのはその多彩 (当時は耕作)・有島武郎生馬兄弟・秋 舞台照明家や舞踊家として活躍した 宮内省の干渉をうけ解散を余儀 ドイツ文学者の実吉 山田耕筰作曲

表された三島の手記 料としては三島家所蔵 うに向き合ったのかを見つめることで、華族とデモクラシーをめぐる状況の一端をあきらかにしたい。 ない 本稿ではデモクラシー世代の申し子ともいえる三島を中心に、友達座の活動を素描 · 引用はいずれも「通陽日記」からである。 「日記より 「三島通陽日記」 (私-―友達会―社会―のことを)」(以下「通陽手記」) (以下「通陽 記6 および雑誌 [TOMODACHI] による。 彼らが時代とどのよ 第一 なお特に断っ 巻第三号に発 主な史

後は陸軍中将となった侯爵四條隆謌の四女である。兄弟には弟通隆のほか、 として、また第八代日本銀行総裁として活躍した人物である。母加根子は幕末の七喞落ちの一人として、維新 太郎は「土木県令」「鬼総監」などと称された子爵三島通庸の長男で、貴族院の最大会派研究会の最高実力者 (以下通陽) は一八九七年一月一日、子爵三島弥太郎の長男として東京市麻布区に生まれた。父弥(8) 妹の寿子・梅子がいた。通隆は兄

分であった。病院のベッドや、東京から遠く離れた大磯別荘での日々は退屈きわまりないものであったが、そ 恨み言としてぶつけているのだが、愛情一杯に育てられた少年にとって大人の表裏はそれだけで傷つくには充 とり置き去りにされた寂しさを、とりわけ両親のいるときと、そうでないときとで対応に差のある看護婦への に、人一倍甘やかされて育てられて何の悲しみも知らなかつた私は、此病院に入れられてから、始めてつく あり、当時のことを回想した作品「錦華鳥」のなかで、「この十一と云ふ年になるまでは、体の弱かつたため なくされ、学習院中等学科への進学は一九一二年四月であった。病気は少年期の通陽にとっては大きな事件で ル胸に受け、これがもとで肋膜炎となってしまった。三ヵ月の入院、さらに数年間の大磯での転地療養を余儀 が、一九〇八年、初等学科五年のとき叔父弥彦に連れられて観戦した一高対三高の野球の試合でファウルボー の影響から文芸活動、演劇活動をともにし、梅子は土方与志の妻となった。 通陽は一九○三年、学習院初等学科に入学した。身体はあまり丈夫ではなく病気で休みがちな子供であった 惨酷、 陰険と云ふことを味はされた」と記している。具体的には、(9) 病院のベッドにひ

雑誌を発行したいという通陽の願望は、

九~一〇歳の頃までさかのぼる。

にとって憧憬の存在)は次のように述べている。 感受性は鋭敏になった。 病気体験が通陽の文学的才能に寄与した点について、 有島生馬 (白樺派、

通陽

て来たその原因ではなかつたらうか? (10) (10) を持てしめず、権勢に乗じ安逸の眠に陥り易い境遇の君をして絶えず人道的な正義を憧憬せしめ 流るべき地位にある君をしてよい深い同情心を養はしめ、 面から云へば君の病身だつたといふ悲しむべき不幸が却つて一種の羅針盤となり、や、もすれば剛慢に 常に外物の誘惑に接触せねばならぬ君をして内

名を得るが、その原点は大磯時代にあった。 「三島通陽関係文書」のなかでも異彩を放っている。通陽は驚異的な筆まめさから後年「ポストキング」の異して各所から珍しい絵葉書を受け取った。通陽の絵葉書蒐集は生涯の趣味となり、その厖大なコレクションは通陽はまた大磯での無聊の日々を紛らすために家族親戚や友人、知人に宛ててせっせと手紙を出し、返信と

誌まで刊行してしまう。(4) 意欲を高めていったのも自然であるが、 思われる。それらのなかには学習院の先輩たち、 通陽が文学への関心を高めたのも大磯時代であった。おそらくさまざまな文芸作品をむさぼり読んでい 仲間同士の回覧雑誌ならよくあるが、 通陽の文学少年としての最大の特色は自ら文芸雑誌を創刊したことで 通陽の場合、 白樺派の作品も含まれていたであろう。そうしたなかで創作 家が裕福なこともあり、『三光』という本格的な雑

209

 $\overline{\mathrm{M}}$

M

彼はまず複写紙で作った

聞』を不定期に発表、大磯時代には謄写版印刷機を買ってもらい友人と『チェリー』という雑誌を月二回ペー

正会員の三種を設け、毎月発行する『三光』に会員の作品を掲載することになっていた。創刊号をみると援助 あり」などとした規約を定め、同誌を編集する「三光会」を邸内に置き、会費の納入方法に応じて名誉・特別 あるという。『三光』は子供の真似事とはいえないほどの本式なもので、「本会の目的は少年の文芸鼓吹するに 版印刷によって刊行した。「三光」とは日と月と星の三つの光るものを意味し、三島の「三」にも引っかけて スで刊行したという。学習院中等学科に進んだ後は、まず土方与志(本名久敬、以下与志)と雑誌『山水』を、 ついで一人で回覧雑誌『チェリー』を編集し、さらに一九一二年一〇月からは同誌を『三光』と改題の上、活

認できる 巻第三号(一九一三年三月)から、実吉捷郎は第三巻第一号(一九一四年七月)から特別会員として名前が確 名誉会員の筆頭には 『山水』『チェリー』以来の同志である与志の名が確認できる。このほか近衛秀麿は第二

者である賛成会員には祖母和歌子や、叔父村井弥吉、叔母日野鶴子をはじめ三島家の親類が名を連ねており、

なった。当時学校では犬養健君やらを中心として「白樺派」の心酔者がグループをなしていた。 学を志す故岩村英武君、 のように回想している。「学習院の上級に進むにしたがって、いつか、音楽家になろうとする近衛秀麿君、 芸術的関心や能力を向上、 光』に戯曲や劇評を発表するなど、「三光グループ」とでもいうべき少年たちの活動は、相互の交流を通じて 誌に掲載した作品をもとに処女著作集『愛の雫』を刊行するなど文学への傾倒をつよめていった。与志も『三 『三光』において通陽は、当初は「錦華」、一九一四年七月からは「章道」を名乗り、一九一六年九月には同 小説を書こうとする三島章道君や、その他二三の上級生や、私やが一群をなすように 増幅させていった。当時の学習院における彼らの様子は、与志が自伝のなかで以下 私達のグルー

独自の光彩を放つものとした。 て「友達座」は『三光』を母体に形成、発展していったことにより、その活動を白樺派の追随にとどまらない 関心をもつ三光グループが一つとなって取り組んだのが演劇であった。 点張りで、私は白樺一派の独善的態度を嫌悪し、文学としては谷崎潤一郎氏の作品を好んだ」。多様な芸術的プでは、三島を除いて、白樺派とは皆無縁であった。或る一部は永井荷風に私淑し、近衛はベートーヴェン一 白樺派が席捲する当時の学習院にあっ

は白樺派の人道主義を嫌い谷崎潤 でしたが、考えや趣味はかなり異っていました。兄は白樺派や乃木希典学習院長に心酔していましたが、与志 であったが、その性格や関心はかなり異なっていた。土方梅子は二人について、「与志と兄〔通陽〕 . る。 友達座は通陽・与志・近衛・実吉が四本柱で、さらにその二大支柱が通陽と与志であった。二人は友人同士 この差異は、 最終的には二人の生涯の進路を分かつことになるが、それはまだ先のことである。 一郎や永井荷風を好み、 乃木式教育に反撥していました」とちがいを語って は仲好し

一 演劇集団「友達座」の発展

篤「わしも知らない」と、「ヴェニスの商人」の法廷を演じたという。(8) といい、そうしたなかで「三島が主となって芝居をやろうという事」になり、 を読んで感激して、その劇芸術に関する対話を翻訳したり、 グや、イプセン、メーテルリンクなど「無暗矢鱈に戯曲を読」み、「或る時、 友達座は、主として通陽と与志の共振の中から生まれた。与志の自伝によれば、 劇場建築や演出全般に関する著書を読み始めた」 千駄ヶ谷の三島邸で武者小路実 ゴルドゥン・クレーグの論 当時、 彼はストリンドベル

けているため、現存する日記からは与志の回想に符合するような演劇は確認できなかった。だが、それとは別 通陽日記」は一九一四年以降がほぼ残っているが、一九一四、五年は記述が薄く、また一九一七年分が欠

に一九一六年三月五日に三島邸で、家族や親類を観客に武者小路実篤「二十八歳の耶蘇」、森鷗外「なのりそ」

を演じていることがわかった。このときはまだ友達座とは名乗っていない。

こんどはさわぐ。チョイトハジマリ等やる。だん~~お客かへる。よっちゃん、岩村君一番しまひまでの 朝トコ屋へ行ッテカミヲワケテモラウ、土方来ル。ケイコスル。近衛来ル。サルコリー氏来ル。けいこス朝トコ屋へ行ッテカミヲワケテモラウ、土方来ル。ケイコスル。近衛来ル。サルコリー氏来ル。けいこス メコ、ト琴ノ先生トデ琴三絃の合奏アリ。又ソプラノ等モアル。「なのりそ」すみておべんとうを食ひ、 ロシ、十人デタ、オーケストラモアル。仲々ヨシ。金幣ガーツーツ写真ウツス、ヒサコ、キヨコサン、ウ ラ沢山アリ。松平康昌、 来ル。岩村君モ来ル。二時頃カラハジム。三馬鹿デハ土方君ガ声ガ出ナクッテオカシカッタ。オーケスト ル。中食。清水輝子さん来ル。オ客だん~~と来ル。一条家、日野家、日高家、西村家、秋月家ノ人々モ 康信、綾子さん等来リオーケストラニ加入ス。「二十八歳ノ耶蘇」悪魔一ハ評ヨ

だらう。残念である」と日記に落胆の心情を記している。もっともこのときは日記をみるかぎりではどこまで なってしまった。代役を打診した相手にも断られ、見通しが立たなくなり、「たぶんヴェニスの商人はやらぬ 月三日になって「父上〔弥太郎〕の所ヨリヴェニスの商人ニ女ガ出テハイケナイトイハレタノデ大サハギ」と 当初は「二十八歳の耶蘇」「なのりそ」以外に「ヴェニスの商人」も演じる予定であったが、上演直前

こり英語マーチャントオブベニスをやる。

本式なのかはっきりしないが、「ヴェニスの商人」も一応上演できたようである。 いずれにせよ女優問題はそ

を上演した」と述べている。 客席にして、各メンバーの知り合いの文壇劇壇の先輩などを招待して、ヘッベルの『マリア・マグダレーネ』 習院以外の人も加わって「友達座」という素人劇団を組織した。そして、芝の村井邸の食堂を舞台に、 から、一九一七年から一八年初頭に結成されたものと思われる。劇団名は雰囲気からみて通陽の命名であろう。 記述が頻出した上、同年六月二五日条に「友達座の決算報告」「夜友達座の慰労会」という語が出てくること の後も彼らを悩ませつづけた。 通陽日記」をみるかぎり一九一六年段階ではその名は確認できず、一九一八年日記では当初から演劇関係の 友達座による最初の試演は、 友達座は通陽・与志・近衛ら三光グループの演劇への関心の高まりのなかで、結成されることになるのだが 一九一八年五月である。与志は自伝のなかで「先に述べた私達のグループは学

上演は五月八日で、「通陽日記」には以下のように記されている。 しく、一方には感心した。少し独断すぎるなと思へる所もあったが総体に於て感心した」と感想を記している。 月四日で、三月九日より同邸で練習を開始、「土方がすっかり夢中になって形をつけてるのが、一方にはおか 通陽日記」によれば、叔父村井弥吉邸の食堂と客間を劇場として借りることが決まったのが一九一八年二

やって来た。午後写真屋来りいろくへの場面をうつす。 りした。けいこはほとんど出来なかった。有島〔生馬〕さんが花束を持って来て下さり暁子さんや奥さん 午前村井家行っていろ~~したくをする。クラ、が仲々来ないので心配して電話便声出したりして居たら 土方が舞台かん督としてうつしてもらひたがった

又戸をさかさにあけ様とした。岸田〔劉生〕君がほめてかへった。三幕目ぶじにすみ四幕目は自分がラン はクラ、が食たくをかたづけるのを忘れ、自分とのせりふを一つつかへた。又自分は帽子を舞台にわすれ も来られた。堀口〔大学〕さんも来れた。だん~~お客さんも来た。一幕目は大成功におはった。二幕目

プをひっくりかへした。しかし大成功におはった。

実吉君をおくる。はこの中で清さんがほめてくれた。 さなかった。上出来だった。皆感心した。あとかたづけをして、みんなよろこびつゝかへった。自働車で 土方があいさつして役者がならんでおじぎをした。皆からほめられた。 愉快であった。一人の失敗者も出

直前の二二日には友達座展覧会が開催され、メンバーらによる絵画等が陳列されている。このあたり白樺派の 直光・秋田雨雀・岸田劉生・山田耕作・伯爵柳沢保惠・侯爵佐々木行忠・伯爵柳原義光らがいた。なお試演の 〇両日にニコライ・エウレイノフの「陽気な死」が上演された。観客の大半は招待客で来場者のなかには山本 友達座による試演はこの年の九月にも行われた。「通陽日記」によれば稽古は九月より本格化し、二九・三 企画の主唱者は通陽とみてまちがいない。

二 女優公募問題と華族社会

委員をつとめる叔父牧野伸顕の随員として渡欧し、そのまま三、四年ほど留学する予定であった。ところが一 九一九年は友達座の活動が最高潮に達した年である。通陽は前年一二月よりヴェルサイユ講和会議の全権 「通陽日記」によれば、

最初に女優公募が話題になったのは六月一八日である。二五日には

やないかなぞと云ふ話になった」という。 私演会、 活動は活性化し、彼もまた悲しみを紛らすため、次第に活動に力を入れていった。「友達座ではこの秋は一つ 九一九年三月七日、父弥太郎が急死したため悲嘆のうちに帰国を余儀なくされた。通陽の帰国を機に友達座の 音楽会、展覧会それからモダウエルの "Thetre of To-day, を各々が専門の所を翻訳して出版しやうぢ

九一三年九月で、抱月の病死と後を追った須磨子の自殺を機に解散したのが一九一九年であった。 九○九年が起源となる。島村抱月・松井須磨子を中心とした芸術座が有楽座で第一回講演をおこなったのが 坪内逍遙が主宰する文芸協会が発足した一九〇六年、二世市川左団次と小山内薫が自由劇場設置を発表した ここで演劇史を確認しておくと、日本で西洋文芸に基盤をおく新劇運動が勃興したのは一九〇〇年代後半、(22)

だ草創期であり、

友達座の試みは多くにおいて先駆的であった。

先の「ヴェニスの商人」試演の際、 座にかぎったことではなく古典的な課題であったが、華族社会は男女の交流、女子の言行にはとくにきびしく、(※) た。そこで、このような特殊な人の集った劇壇では、女優難は必然の事だった」という。秀は女流歌人で芥川 には男優は十分いたが、女優としては、秀しげ子氏や渡平民氏夫人〔とし子〕などがいるきりだった。当時に 龍之介と深い関わりをもつことになる人物、渡の夫平民は劇作家、児童文学者として知られる。女優難は友達 あっては、上流家庭でも、男の子の自由は多少あっても、女の子には芝居をするなどという自由は許されなかっ 演劇活動の発展は、女優起用問題をいよいよ切実となものとした。当時の状況は与志によれば「「友達座 女性が舞台に上がることを禁止されたように、身近な範囲で女優をみつけ

「福沢舞台

いわれていた福沢桃介邸を借りる話がつき、二八日には女優募集の広告文の検討を行っている。

トニナッタリ、女優募集ノ広告ヲツクッタリシタ。 ソレカラ僕ノ宅デ土方ガ支那芝居ノマネモシタ。ソレカラ Theartre of Today ヲミンナデ訳サウトイフコ 英武〕、秀〔しげ子〕、松平〔康信〕、長谷川〔龍三〕。食事ヲシテイロイロ友達座ニカンシテハナシヲスル。 ソレカラダンダンミンナ集ッタ。近衛〔秀麿〕、加藤〔成之〕、土方〔与志〕、実吉〔捷郎〕、岩村

がみてとれる。女優募集は七月一日『新潮』にまず掲載された。 模型舞台ノコトデ大サワギ。耕作氏ノピヤノモヤッタ」とあり、友達座との関わりの深い文化人とのつながり 夫人、与謝野夫人〔晶子〕、斎藤〔佳三〕、同夫人、ペシイ、チェレミシノフ等ノ人々ガキテ、十一時スギマデ また六月三〇日条には、「夜、有島武郎、小山内〔薫〕、秋田〔雨雀〕、〔有島〕生馬夫人、〔山田〕耕作、

司

友達座女優募集

駄ヶ谷七六二、三島章道宛にお知らせを願ひます。いづれ委細の事はお知らせ次第お伝へ致します。 たいと存じます。私達と一緒にまじめにやつて見ようとお思ひの方は、どうぞ七月二十日迄に東京府下千 今回私達が友達座第三回試演を致すに就きまして真に劇芸術を愛される四五人の女の方々の御助力を願ひ

達

友

座

英 武

岩

村

との 術を研究する仲間を求めるものとするスタンスが貫かれていた。 来ない な気持をお与へする事ができる丈けで物質的には当分何のお礼も出来ません」とのコメントが載った。応募者只私達は創立以来日も浅く経済的の基礎も未だ固まつて居ませんから私達はその方々に劇芸術に対する真面目 ひ度いと存じます、私達も未だ舞台経験の浅い素人許りですが熱心に芸術を愛する人ならば素人で沢山です、 都新聞』にも紹介記事が載った。『都新聞』 最初の 事。 第二には役不足を云はぬ事。 面接は八月一日に土方邸で行われ、 第三は稽古によく出る事」 記事には「四五人の本当に芸術を愛される女の方々の御助力を願 以後幾度か実施された。応募者には 面接の様子は の三条件をはじめに断るなど、 「通陽日記」 「第一に物質的のお礼 八月一日条に以下 あくまで芸

土

方 島 島 吉

与 通 章 捷

志 隆 道 郎

実 近 松 加

女優募集は、

その後、

与謝野鉄幹・晶子夫妻の紹介で

『婦女新聞』

にも掲載された。さらに

『時事新

長谷川 平 衛 藤 村 秀 康 成 龍 和 雄 麿 信 之 \equiv

岩

0

ズイ分ツカレタ。自働車ガムカヒニ来テカヘルマデ夜一人ノ女優ガクルトイフノデマッテイタガトウトウ ロヲウツサシテクレト云ッタガソレヲコトワッテ四人ダケデウツシタ。夜ハモケイブタイモミタ。ロヲウツサシテクレト云ッタガソレヲコトワッテ四人ダケデウツシタ。夜ハモケイブタイモミタ。 コナカッタ。ソレカラズイ分サワイデ自働車デカヘル。 ヤ近衛モ来タ。高橋サン御夫婦モ一人ツレテ来レタ。朝日ヤやまとノ記者ガキテ女優ヲシラベテイルトコ ドンキタ。都新聞ニ出タノデソレヲ見テ来タ人々ガ多カッタ。中ニハズイ分女中ノヤウナノガイタ。実吉 カヘッテイロイロシテカラ土方ノ所へ行ッタ。シバラクシテ成松トイフ女ガキタ。ソレカラツヅイテドン

るように、すぐさま世間の噂になった。 青年華族による女優公募とオーディションは、右「通陽日記」中の新聞記者の興味本位な取材ぶりからも窺え 面接の結果、最終的に野中花子・白鳩銀子・白井菊世・小林富代をはじめとする女優十数名が採用された。

コトニカンシテ、クワシク申上ゲタ」と婚約者の両親の憂慮に胸を痛めている。松岡からは八月三一日に尋問 ラ気ニナラナイノダガ、タイヘン曲解ヤ誤解ガアルラシイカラデアッタ。母上ニ長イ手紙ヲカイテ女優募集ノ モノダト云ッテイラッシャルトイフコトヲキイタ。タイヘン気〔ニ〕ナッタ。僕ノ仕事ガ父上ノ主義ト違フナ 面接開始後の八月五日条には「麻布ノ〔純子の〕母上カラ手紙デ女優募集ノコトカラ父上〔松岡均平〕ガ考へ いた通陽のもとへ婚約者の松岡純子より手紙で「華族ノ人カラ大サワギダトノコト」との情報がもたらされた。 通陽日記」で関連記述を確認すると、最初は広告が出てまもない七月一〇日条で、名古屋方面に出

説いていたし、ほかにも彼らの自由恋愛主義や、文化人との交流(その中には左翼的な人物も少なくない)な活動が左傾化することへの警戒がみてとれる。実際、「通陽日記」をみると、与志は「スラブ論」をさかんに かわらず通陽の危機感は薄く、特段根回しや対応策を講じることもなく八月中旬から下旬にかけて軽井沢に避 どを考えれば、 ドウカトイハレタカラ、ソレハ人モシダイデセウト申上ゲタ」などと話し合っている。松岡の懸念からは芸術(②) ンカイシタ。只イントン的ノコトヤ共産的ノコトヤ、イロイロ気ニイラヌ所ハ云ッタ。文学ヲ道楽ニサレテハ解) たり、いかにもナイーブな対応であった。 暑に出かけ、有島武郎や山本直光らと軽井沢夏期大学に参加するなどしている。後の事態を考えると、この 華族社会に波紋が広がったのも無理からぬところであった。そうした中で当事者であるにもか

ところへ学習院の先輩原田熊雄や与志から別の中傷記事に関する情報がもたらされてい 的なものとなっていく。「通陽日記」九月一四日条では『報知新聞』『萬朝報』の批判記事に衝撃を受けていた 友達座は九月一三日から福沢舞台で稽古に取りかかった。題目はメーテルリンク「内部」と武者小路実篤 中の一小出来事」であった。ところが、この頃から報道の論調が事実と乖離した興味本位

ラデンワデ毎日ニハ福沢ガ大将デ貞奴ガ先生ダトデテイルソウダ。

コッケイニモホドガアル。

(電 略) 原田サンニモアッタ。 ノデイヤナ気ガシタ。 ツケタリ女優ヲヨーシタリシテ名門ノ公達ガ時セイモシラズニイルトイフヤウナコトガカイテアッツケタリ女優ヲヨーシタリシテ名門ノ公達ガ時セイモシラズニイルトイフヤウナコトガカイテアッ 国民 コッチノ芸術ニ対スルマジメサモシラナイデ外面バカリノミカタヲスル。 〔新聞〕二悪口ガカイテアルトイフノデ、カヘリニカッテミタラ、オシ ・ロイヲ イヲ

いても、 るのかもしれない」などと千里眼的な超能力を引き合いに笑い合ったという。新聞に中傷記事が出た段階におしさに、遠く名古屋にいる貞夫人から「近頃はやる催眠術の遠距離療法とか云ふ奴のやうに遠距離教授が出き 奴との師弟関係は福沢舞台から派生した憶測記事の最たるものであり、さすがにメンバーもあまりのばかばか の挑戦的態度に出ると斉しい」などと華族の体面を汚し、さらに階級対立を煽るものと非難している。 没頭するが如きは言語道断の痴態である、斯の如きは殆ど是等特種の階級が無産者の多い国民に対して、 たあげく「自ら皇室の藩屏を以て任じながら毫も国民の模範たるを想はず生温い面に白粉を塗つて狂言沙汰に 午後一時から連日の努力だ、 でも藩屏か」という見出しのもと「華族の若殿原が財界の高等幇間福沢桃助に唆のかされ、白井菊世、 を知らず。 「国民新聞」には 田村百合子と自称の女優志願者を集めて素人芝居の道楽稽古に取蒐つた、 彼らは自分たちの行動は真に芸術を求めるものであって何ら疚しいところはない、 覚醒乎、抑も改造乎」との文言が躍り、『毎日新聞』はさらにひどく、「痴態に耽る華族の公達 「名門の公達等、紅粉を塗り、 お師匠さんは言ふ迄もなく例の川上貞奴」と、誤認と揶揄に満ちた活動紹介をし 鬘を著け、女優を擁して演劇に熱す。又脚下に焰の迫れる 場所は下渋谷の福沢邸で、 と動揺をしていな 小林富 川上貞 本日 是

四 宮内省の干渉

61

事態は九月一八日に急展開をみせる。「通陽日記」 には緊張した状況が左のように記される。

居ハ出来ヌ、カンゲンスレバ労働者ハヤトヘルガ、労働ハ出来ヌトイフコトニナルノハ社会問題上イケナ イトイフコトニナッタ。イロイロノギロンガ出 アッタガ、ソレデハ友達座ノ色ヲ出スコトガ不可能ダシ、ソレニ華族ハ人ヲヤトッテ芝居ハ出来ルガ、芝 ルモ、実吉ハ自分ガイテハミンナノ歩調ガアハヌカラ列外ニデルトイフ。男優ヲ募集シヤウカトイフ説モ クコトニナル。先生シッカリタノミマスナゾト女ノ人々ニオクラレテ出テユク。ミンナハ大イキゴミデアクコトニナル。先生シッカリタノミマスナゾト女ノ人々ニオクラレテ出テユク。ミンナハ大イキゴミデア カ、実吉ハケンカスル気ナラユカヌトイフ。ゴハンゴミンナデ井上〔勝之助 レカラドホシヤウ。千石〔政敬 トホシテクルトイフ。叔父上ニハ出来ルダケオハナシヲシテミル気ダガケンカスル気ハ自分ニモナイ。 スルコトハナイガ、アッタラソレデモヤルトイフ。トニカク大サワギダ。自分ノハ牧野 ル気ガナイカラ止メルトイフ。土方君ハミンナガヤレバドコマデモヤルトイフ。岩村ハ父上〔ト〕ケンカ 宮内省ノソウシツ寮カラ中止命令ガキテ、ヤメネババッスルトイフノダサウダ。実吉君は父上トケンカス(『『) 午前有島サンへ行ッテヱヲカイタ。午後一寸ヒルネシテ、芝居ノケイコへ行ッテミタラ大サワギデアッタ。 宗秩寮事務官〕サン(実吉ノトコロニ云ッテキタ人)ノトコロへ行カウ 宗秩寮総裁〕サンノ所へ行 〔伸顕〕叔父上ヲ コ

張した。 演劇への傾倒をつよめていたことに加え、華族階級からの決別を密かに期していたこともあり、(32) 処罰をちらつかせて活動を止めようとしたことは、友達座メンバーにとっては衝撃であった。このとき与志は 「通陽手記」によれば「自分は舞台監督だから、皆がどこまでもやると一言云つてくれさへすれば、 皇族、王公族、 爵位、 華族などに関する事務を掌る宮内省の部局である。 華族を監督する同寮が 強行突破を主

者だから、 自分は如何なる困難を排し、どんな犠牲を払ひ、どんなものを捨てゝも大ひに君達とやる。自分は芸術至上論 たほれるまでもやる。しかし皆がぐぢや~~になつては舞台監督一人えばつて居ても張合がな

けたいというものであった。華族社会は複雑に縁戚関係が絡まっており、与志のように決別までも覚悟してい と発言したという。これに対し、通陽をはじめメンバーの大勢は、何とかしたいが、宮内省との正面衝突は

るならばともかく、 周囲への迷惑を考えると躊躇はやむを得ないところであった。

協議の結果、実吉をのぞく一同で宗秩寮に出向き、井上総裁に自分たちの真意を伝え、結論はその上で決し

であると反論しているあたりは、いかにもデモクラシー高揚期らしい。 ら成果を得ないまま帰るほかなかった。なお「日記」後半で、自分たちの出演は取りやめ男優を雇い芝居を行ら成果を得ないまま帰るほかなかった。 えばよいとする意見が出たことに対し、華族は労働者は雇えても労働はできないことになり社会問題上不適当 ようということになった。女優に見送られ勇んで出かけていったものの井上には面会を拒絶され、 この日は何

得た上で、其人のてずるである筋との了解をつけてみやう。それにはなるたけ広く各方面の方におめにかゝる 術に理解のある人で、我々に同情のある人で又或筋とも相当聯絡のある人を訪問し、先づ其人々の理解同情を 会見が叶わなかったことで彼らは方針を転換し、「名望地位のある人でどこかで我々の尊敬し得る人で、芸

なった。彼らもまた上流層に網の目のように張り巡らされた華族人脈や文化人との交流を使って反撃に出た。 といいと云ふ事になつた。と同時一方には、文壇の人々とか其他の有力者にも後援者を作らう」ということに(35)

通陽日記」で確認すると、九月一九日、通陽は、伯爵二荒芳徳を訪問した。二荒は、高等文官試験合格後

愛知県や静岡県に勤務し、一九一七年より欧州に出張した経歴をもっており、後援者としてはうってつけであっ その二荒からは「自分ノヤルコトヲサンセイシテ下サリ、若シ宮内省カラキカレタトキハ弁ゴスルトノコ(対域)

め

効果はあらわれ、

九月二一日、

公共から電話が入り「宮内省デハムシロ文芸ノ研究ハシ

、 ヨウレ し が

イシタ

との

「調停案がもたらされた。

宮内省との調停役として奔走することとなる。 は「君達ノ態度ヲ世 長であった子爵武者小路公共 情」を得るとともに、 岩村は小山 トダッタ。 ノシテイルコトハワルクナイトイフ」との言葉を得たという。 コトニ賛セラレタ」という。 単二武力ノミデナク、文化モ世界トタイトウニナラネバイカントイフ考へカラ、 .内薫を訪ね、それぞれ助力を得た。 **l間ニ弁明シアルトキハ罰ヲウケテモヤリトホセ」と激励された。** 井上総裁と面会してもらう約束を取り付けた。さらに、 同じ日、与志と近衛は、有島武郎・生馬兄弟や社会運動家の加藤時次郎を訪 (実篤の兄)を訪ねたところ、おなじく宮内省訪問を約束してくれた。 また加藤成之は森鷗外を訪ね「モシ宮内省カラキカレタラ君達 その後、 全員で伯爵柳沢保惠を訪ね(37) その帰途に外務省政務局第二課 公共はこの後、 我々 一大イニ同 友達座と ラヤ

枝完二等がいたという。(38) ている。「通陽手記」によれば、 体ノ責任ヲハタシタイカラ団体トトモニ行動シタイトイッタラ、ウントイハレタ」とあり、 タガ、アマリ社会ニワーットヤッテ、ワカラズヤノ誤解ヲカッテモソンダカラトノ御注意デアッタ。 このほか二六日には、 内 いずれも華族や文化、 通陽は叔父の男爵牧野伸顕に面会している。 加藤 ・森のほかに伯爵小笠原長幹・ 当時、 友達座に対する同情、 芸術方面の有力者である。 支援者としては今あげた武者小路公共 伯爵柳原義光・子爵黒田清輝・ 「叔父上ハ我々ノ仕事 老練な対応をみ ハミトメテ下ス 長原孝太郎 自分 ハ ッ

トイフコトデ、 イ位ナノダトノコトダ。 シカシ芝居ヲスルノニハ女モイルカラ、 只女優募集ガイカントイフコト、 小サクドコカデヤルノナライ、トイハレタソウデアル バショガイカントイフコト、 (場所) 切附ヲウル ノガイカン

メンバーのなかでは与志が最強硬論者であり、

舞台監督らしく福沢舞台からの変

志もはじめての試練は相当こたえたようで、九月二五日に通陽・岩村兄弟と相談した際、「遂ニ土方君モ宮内 吉からは「主義ノタメニスルノニ青クナッチャダメデスヨナゾ」とたしなめられている。後に爵位を捨てる与 吉と会った際には、「加藤ノ祖父〔泰秋子爵〕、祖母〔福子〕ニナイテトカレタ」と閉口の旨を漏らし、叔父弥 更不可ににこだわったが、だがその与志ですらも動揺は隠せず翌二二日、上野で妻梅子とともに通陽・村井弥

省ノ要求ヲイレ、一先ツ女優ヲカイサンシ、又地所モ他デヤラウトイヒダシ」ということになった

記には、事態は深刻であるにもかかわらず、どこか暢気な青年華族たちの風貌がよくあらわれており、 通陽日記」九月二八日条には、村井弥吉邸借用のため皆で交渉に出かけたときのことが記されている。日

はから

ずも時代の雰囲気までも見事に表現されている。

デアッタ。ミンナデ十一時ゴロデ、叔父上ノ所へ行ッタラオルスナノデ、新橋ノ東洋ケンデ食事ヲシテ、 朝友達座ノ人々ニ集ッテモラッテ弥吉叔父上ノコトヲハナシ、オメニカ、ラウト思ッタガオルストノコト(富さ)

ナカナカ面白イ。ソレカラ庭ヲグルグルマハッテカヘリ、トランプシタリ、トウトウ武藤サンハ三味線ヲ ダンダン人モアツマッタノデ whisling, rase ヤ Sigalette, race ヲヤッタリ、ハンケチレースヲシタリシタ。 ソレカラ蒲田〔三島家別邸、稽古場として利用〕へ行ッタ。野中サン、ヨサノサンナゾガモウキテイタ。

ヒキダシタ。白鳩サンモヒイタ。夕方解散

夜トウトウ亭ノ支那料理へ行ッタラマダヒライテナイノデ、天金デテンプラヲタベ、叔父上ノ所へ行ッタ。(ㅌ ㅌ ㅌ) トニカク叔父上ノ所デハツゴウガワルイシ、九州クラブハイケナイシ、土方ノ天幕モ面白クナイトイファ ウントイロイロ ハナサレタ。友達座ガアマリ強クナイトイハレテ、ミンナ困ッタ。

デ考ヘルトイフコトデオ別レヲシタ。

当初の予定どおり福沢舞台でいくことになった。 記 又出来ルダケツッパッテミナケレバイカン」などと激励していた。その後、 村井 !の要領を得ない様子からも窺えるように、 は当初 友達座 0 面 々に同情的で、 前日、 借用話は頓挫してしまい、さらに他の思案もうまくいかず、 通陽以下が面会したときには 何らかの圧力がかかったのか、 「自分ノウチヲカシテヤラウ、 Н

五 友達座の解散

記事が載ったことでメンバーの間に動揺が走った。そして、この日ようやく宗秩寮関係者との面会が実現した。 とって重大な一日となった。この日はまず『東京朝日新聞』に「宮内省の干渉で 通 女優募集が新聞で騒動となってから約半月、宗秩寮の干渉が入ってから一〇日余り、九月二九日は友達座に 陽日記_ 」には当日の緊迫したやりとりが記されている。 「友達座」 解散さる」という

朝 クナイガ、 行ッテ仙石 口 相談シ、 日新聞二 世間々々トイフ。 トニカク舞台ハ福沢ノトコロデヤルトイフコトニシテ武者サンノ所へ行キ、ミンナデ宮内省 我々ガ宮内省ノコトデ解散ニナッタトデテイルノデスッカリ心配シタ。 〔政敬 宗秩寮事務官〕、福岡 殆ムド自分ガハナス。 〔秀猪 宮内省御用掛 トニカク二ヶ条ハオイレシテーヶ条ハコマルトガンバ ・宗秩寮所属〕ノ二子ニアフ。 朝ミンナ集ッテイ 芸術 口

ル。 トニカク又オ返事ヲキクトイフノデ引サガル。待カマヘタ新聞屋ニ質問サレタガ武者サンガカ、ナイデク カクノナラ自分ノハナシトシテ、ミンナガマジメダトカイテクレトイハレタ。ソレカラ武者サンヲオ 仙石サンハイ、トイハレタガ福岡サンガイケナイトイハレ、武者サンガイロイロトリモッテ下サル。

悪クナイガ、 宗秩寮へは公共の同行のもと、仙石政敬事務官と福岡秀猪御用掛を訪ねた。両名とも子爵である。「芸術ハ 世間々々トイフ」両名に対し、 通陽を中心に談判を行い、女優の解散と切符販売の中止の二条件

送リシテカヘル。土方、岩村来リスコシアソブ

カラ、 は出ないまま会見は終了した。終了後、 を受け入れたが、舞台の変更については拒み通した。仙石は了承したが、福岡は最後まで反対したため、結論 動揺はなおもつづき、翌三〇日には、通陽のもとを実吉が訪ね、「友達座ノハナシスル。実吉ハ個人主義ダ 団体エハドウモハイレヌトイフ」として、友達座からの脱退を申し入れた。実吉は一八日以来すでに活 彼らは待ち構えた新聞記者に取り囲まれたが、公共がかばってくれた。

る」ことで決着した。 ないが、友情は変わらず「私交上は前の通り仲よしで、只団体から名だけぬけた。 の一つ「内部」 動を自粛していたが、四本柱の一角が崩れたことはグループにとって打撃であった。しかも実吉は今回の演目 の主役であっただけに、上演そのものが危ぶまれた。相談の結果、 勿論大いに後援はしてくれ 友達座としての活動はでき

をそかれ早かれ芸術的良心からも改革しなければならなかつたのとで、とう~~「内部」はやれそうもなくな のだつたし、又新参の「群衆」をかなりレジスールがもてあまして居たのと、それから集めた女の人々を当然 実吉脱退を受け、与志を中心に題目が再検討された。「通陽手記」によれば「「内部」は実吉が主人公するも

にした」という。 になり、 を選んだ。女の人が六人男はお爺さんが一人出るのである。爺さん役はその人にむいた岩村〔英武〕 つて来た。〔中略〕そして「内部」のかはりには与志が骨を折つて〔メーテルリンク作〕「タンタヂール 女の人の役割もきまつた。「嬰児殺戮」は実吉の代りには長谷川にでも出て貰つてそのま、やること がする事 0

の集団から幅広い芸術研究団体をめざすというもので、友達座は発展的に解消された。 ので、「内部」のデザインだけでもみせたい」といって中止となった演目 にまったく悲観してしまっており、せめてもと一〇月一日、 演劇への情熱は依然消えてないようにみえるが、友達座はもはや満身創痍であった。与志は、 〇月三日、 友達座はついに解散し、芸術集団「友達会」として再出発することとなった。これは演劇だけ 秋田雨雀を自邸に招き、「友達座がだめになった 「内部」の模型舞台を披露している。 友達座 前途

シタガ、 連)、ソシテ友達座ハ解散ニシテ友達会ヲ組織シテ芸術界ニサッサウトイクコトニナリ、 午後宮内省ニ出カケテ、 ヲハッタリ、ギターヲヒイタリシテワカレル。 時間ニナッタノデ福沢家へ行キ女優ヲアツメテ解散ヲ土方ガ宣言シタ。ソレカラミンナデウチニ来タ ヨースルニ平行線上ナノデ、トニカク自分一人デハ返事ガ出来ナイカラトイッテカヘル。〔略 仙石、 福岡両氏ニアッタ。 福沢サンデハドウシテモイケヌトイフ。 新聞ノキリヌキ サンザン議論

のままであったことから、 友達座は解散したが、 メンバーは演劇をまだあきらめたわけでなかった。ただし宗秩寮との交渉はうやむや 準備は目立たないように進められた。演目の一つ「「嬰児殺戮」中の一小出来事.

は、 今純三氏、青木茂氏、佐竹義通氏、木下孝則氏、 氏、長原孝太郎氏、小寺謙吉氏、同夫人、斉藤佳三氏、布目敏行氏、津軽照子氏、高野武郎氏、 告文によれば ための「友達会小品美術展覧会」が一一月七日から三日間、 華族は与志のみであった。 的に旧友達座メンバーで演劇に関与したのは演出の与志と照明の岩村和雄、アグロヴァール役の岩村英武だけ を見せるよりは、これを出すのは中止にして、私も只単にマネージメントの方に全力を尽して、土方初め皆も 「タンタヂールの死」に全力を尽してやらうと云ふ事に」なった。音楽も近衛から山田耕作に代わった。(⑵ 主役通陽の多忙による練習不足に加え、出演者四人が急に出演不能となったことから「なまじつかのもの 「同人は勿論のこと、其の他には有島武郎氏、 かわりに華族メンバーは間接的に支援することとなり、その一環として資金集めの 水谷川忠麿氏、 同生馬氏、同夫人、与謝野晶子女史、 千駄ヶ谷の三島邸で開催された。 白鳩銀子女史、チエレミシノフ女史等の援助 通陽が記した予 山本直光氏 山下新太郎

まして、 耕作音楽により福沢舞台にて上演された。「九割は皆未経験の人々であり、 理解や統一の上に非常に苦しみました」という与志の苦労は並大抵のものでなく、そのため彼は「各 々の性格 ―普通の場合でもこれは俳優によつて直接表現されるものですが――を第二義として―― 能力の違ひや、 様々の困難が

友達座を継承した友達会による試演「タンタジールの死」は、十二月五日より三日間、

土方与志演出、

山田

す」と、錚々たる出展者がう⁽⁴³⁾ 出品がある筈でございます。

なほ同日は私が巴里より持帰つた泰西名画の写真も少しく展覧する筈でございま

と、錚々たる出展者がうたわれていた。

を荷しました。そして各幕のリズムの貫流を握つて、それを淀みなく流す事に努めました」という演出法をと か 俳優の可能性に立脚して― ふべき、 タンタジールの負擔を軽くしてこれに対するイグレーン、ベランジエール、 -最も安全な難のない温健な全体の統一と調和とにつとめ、 演技に於ても子役をつ アグロヴアールに多く

では新しい試み」をもって臨んだ。 山田耕作が今度のために作曲した音楽を前奏曲、 間奏曲に使い 「五幕を休みなく通して演ずると云ふ日本

チェレミシノフ女史の批評を紹介しておこう。ちなみに翻訳は友達座を退会した実吉である。 いる。俳優陣ではイグレーン役の白鳩銀子に高い評価が集まった。ここでは亡命ロシア人の彫塑家で音楽家のへいった。「タンタヂールの死」はおもしろかった。最後の幕は非常にエフェクトがあった」と感想を残して(絽) の」と賞賛している。秋田雨雀も好意的な批評を寄せた一人であるが、彼の日記には「夜、友達会(4)) 幕を通じて飽く迄も幽玄な神秘的な緊張を失はず舞台に少しの隙も見せなかつたところはなか!~侮り難いも であり、とくに幕間なしで演じた手法は山田の音楽と相俟って高く評価された。例えば加藤時次郎は 劇した文化人たちの批評を多数載せている。これをみると与志の演出に対しては辛口なものもあるが概ね好評(46) このときの試演に対しては、『TOMODACHI』第一巻第三号が「試演記念特別号」と題して特集を組み、 一併し各 観

である。彼等は純粋な共鳴と想像とを以つて全体を造り上げたのである。 られ演出せられたことを考へ合せれば猶更である。彼等の多くはヨオロツパにも曾てなかつたやうな人達 全体の調和が優雅に申分なく構成せられてゐた、ことは驚嘆に値する。殊にそれが素人によつて案配せ

和とに於て偉大であり美事であつた。電気装置も忘れてはならない。そのおかげで全体に対して印象の統 ゐた。老僕アグロヴアルの難かしい役も非情にうまく仕遂げられた。舞台装置はその著しい簡素と色彩調 めて精細な感じを以つて聡明に現はされた。妹もよく彼女を扶けたし、タンタヂイルもよく調子を合せて 役割も好く振られてゐた。さうして上手に演じられた。イグレエヌの気分が次第に昂まつて行く所も極

が与へられたからである。音楽からはあらゆるものが生み出された。すべては一つの巧妙な筆触によつ

て描き出された一つの音画であつた。

実演その物にはいくらかの小さな欠陥があつた。が、それは先に云つた理由を勘定に入れ、ば実は爰に

挙げることを許されない程度のものに過ぎない。

であったようで、最終日である七日の模様は「通陽日記」に次のように記されている。 さまざまなトラブルに見舞われながらようやく上演にこぎ着けたことは、友達会メンバーにとって感慨無量

ニナッテシマッタ。小山内サンガヨッパラッタリシテオモシロカッタ。岩村、加藤、白鳩ハヨッテカヘレ 三時頃カラ福沢邸へ行ク。イヨイヨ最後ノ日ダ。今日ハオ客ハ五六十人キタ。最後ノ幕デ火ガキエナイノ ヌノデトマル。自分等ハ信サン自働車デ秀、有島秀武ヲオクリ、宮崎サント三人デカヘリ、スクツカレテ ツ云ッテイタガ、スッカリスンデミンナキゲンヲナホシ、夜ノ二時ゴロマデオドリクルッタ。fancy ball デモウ少シテ幕ニモエサウニナッタノテ白鳩サンガウマクケシタノデ、小山内サンハホメ、土方ハブツブ

ネル。

よりする新劇界に残した大きな足跡をみるならば、ともだち座に於ける試みは、土方にとつて頗る有意義なも 時年少二十歳の仕事としては非常な成功といふべきものであつた」「土方のその後における芸術的思想的 このときの試演に関しては、演出の与志に対し秋庭太郎『日本新劇史』下巻 (理想社、一九五六年)が「当

というふうにメンバーはそれぞれの目指す方向へ進んでいった。通陽もまた文学、青年団活動、そして一九二 は以後一段と演劇への傾倒をつよめ、かつ華族階級からの決別へと向かっていった。近衛は音楽 劇を共通の場に個々の能力を結集しようとした友達座にくらべ、芸術集団としては求心力に乏しかった。与志 刻んだ輝かしい日となったが、同時にこの日は友達座にとって終焉の日ともなった。あとをついだ友達会は演 あった」と振り返っているように、「演出家土方与志」出発の日となった。友達座にとっても演劇史に足跡を(52) のであつたと言へよう」と賞賛している。与志にとっても「私は、この夜を劇壇へのデビューと考えて幸福でのであつたと言へよう」と賞賛している。与志にとっても「私は、この夜を劇壇へのデビューと考えて幸福で 一年以降は生涯をかけた事業となる少年団 (ボーイスカウト)運動へと乗り出していくこととなる。 加藤は美学

おわりに

となろう。もっとも現実の友達座は武者小路が期待するような道は歩まず、分裂、 された。この悲劇とも喜劇ともつかない狭間の状況に対しては武者小路実篤の同情的な手記がせめてもの慰め 前者からは「先進性」が警戒され、後者からは「労働者層」を刺激し、階級間の対立を煽る行為であると批判 その純粋さは、女優公募を機に、自らが属する「華族社会」と、「一般社会」から挟撃を招くこととなった。 では通陽を中心に友達座の活動を検討したが、彼らはどこまでも純粋であり、悪くいえば世間知らずであった。 本稿を終えるにあたり、 友達座がたどった軌跡をもとに華族とデモクラシーについて考察してみたい。本稿 解体していったのであるが。

それは貴族と労働者の救はれない偏見から来てゐると思ひます。 貴族の方では貴族の体面 今時に通用

見へない、きつと今に消える代物と思へます。君達はさう云ふ代物に頭を押えられるのを同情します。さ にしてゐる。その気にする動機が我々はとても同感の出来ない程、偏見から来てゐる今時の代物とは一寸 自分達だけが高尚な人間と思つてゐる。それも品位を高尚にすると云ふのではなく、見へや体裁許りを気 しかねる代物ですが、体面を形式的に何処までも出張する。之が多くの人から反感をもたれる元因ですが

ぞうるさいでせう。

と不節制で、ずつと快楽の奴隷になつてゐる人もある。しかし現世はそう云ふ根性をたきつけるのに最も つて境過さへ許せばもつとい、こと、或はもつと面白いことをして見せる。事実或る者は君達よりもずつ は無理のない処がある。それで貴族のすることなすこと腹が立つ、悪いことでも、い、ことでも自分達だ さて労働者の方は、自分達が不当に苦しんでゐるといふ自覚をもちすぎてゐる為に。又今の世ではそれ

君達はものなり、いかに反感をもつても君達の芝居を見るとよろこばないわけにゆかなくなることを望ん 心になつてやつてゆけば、簡単にうはさしたり、反感をもつたりする人が君達のことを忘れてゐる時分に ついては今かく時間をもつてゐない。ともかく君達が今の熱心を持ち耐える許りではなく。もつと益々熱 君達は真面目にやらうと思つても、貴族には真面目なことが出来るとは思はないのだ。私はこのことに

でみてきたとおりであり、交流をもった多彩な文化人の顔ぶれ一つをとっても明瞭ではあるのだが、 最後に、 友達座メンバーのデモクラシー認識をみてみよう。もっとも彼らとデモクラシーとの関係はこれま 何より彼

ら自身の生の声として通陽の言葉をきくことで締めくくることにしたい。

て見て、しかる後のその人間の仕事について考へを及ぼすべきではないか。略〕本統のデモクラツトなら、もうそんな肩書なんかに目もくれず、超越して、一人の赤裸々の人間とし だと信じる。 各自は各自の天分と趣味と境遇とによつて、やれることを力の及び限り、お互ひに助け合つてやるべき秋 ぎてしまつた筈だ。我々はお互ひに一人の「人間」として、よき国民として、又立派な人類の一員として 云つて、いばつたり難有がつたりして、別の人種でゞもあるやうに考へて来た時代はとつくの昔にもう過 新時代人は最早貴族とか平民とか、そんな肩書なんかに目をくらまされて居るべき秋ではない。貴族だと な云ひ方である。デモクラシーと云ふものと、芸術とが敵同志でもありさうな云ひ方だからである。 又或る人は、デモクラシーの盛んな世の中に貴族が劇の研究をしてはいけないと云ふ。これは実におかし 本統のデモクラツトなら、も貴族とか平民とかそんな肩書なんか気にしない筈である。 我々

ì

- (1) 伊藤隆『大正期「革新派」の成立』(塙書房、一九七八年) 二九八頁。
- (2) 後藤致人『昭和天皇と近現代日本』(吉川弘文館、一九九七年)。
- (4) 友達座を扱った先行研究としては紅野敏郎「「白樺」と「演劇」(3) 後藤前掲書、五〇~五一頁。

(『早稲田大学教育学部学術研究』第一八号、一九六九年)がまとまった唯一のものである。

「白樺演劇社

」と「友達座」をめぐって―」

(5) 河竹繁俊『日本演劇全史』(岩波書店、一九五九年)一〇六六頁。

||三島通陽日記|

は一九一四年以降、

晩年に至るまでほぼ完全に残されており、少年団、ボーイスカウト運動

- 文書」は、 か、政治、文化、芸術など通陽の多彩な活動と華麗な交流を伝える貴重な史料である。日記を含めた「三島通陽関係 ,現在は一般社団法人尚友倶楽部に保管され、華族史料研究会が整理にあたっている。史料の利用を快くご
- ご提供いただいた。美恵子氏の御厚意に感謝申し上げる。 『TOMODACHI』のバックナンバーについては土方美恵子氏(夫君は土方与志の次男で演劇製作者の与平氏)

許可くださった三島昌子氏の御厚意にあつく御礼申し上げる。

8 以下の通陽の履歴は、遺稿集「三島通陽」刊行会編刊『遺稿集 三島通陽』(一九七五年) による。

三島章道「錦華鳥―小さき思ひ出」(同『愛の雫』〈洛陽堂、一九一六年〉)四頁。

9

- $\widehat{10}$ 有島生馬「序文」(前掲『愛の雫』二頁)。
- 読むでは、心を遙かに遠い都の空に馳せつ、返事の筆を取るのが唯一の嬉しい日課であつた」(九五~九六頁)と手 いた郵便配達の来る時間を、病み窶れた細い首を尚ほ鶴のやうに長くして待ち焦れ、色々の友の優しい慰安の言葉を 愛のあどけない見舞状が楽のしみであつた。私は交るがはるからくる懐しい学友の手紙を毎日忠実に運んで来る年老 に遊び盛りの幼い身を冷たい孤独生活の退屈な一日を過さねばならぬやうになつてからの方が殊更に、学友等の純な 「〇さんと私」(前掲『愛の雫』所収)のなかで、通陽は「私は小暗い病床に呻吟して居た時より、寧ろ淋しい大磯
- 学習院大学史料館常設展「大正の記憶―絵葉書の時代」において展示され、新聞各紙でも取り上げられた。 「三島通陽関係文書」に残る絵葉書は、未使用のものを含めると三五○○通を超える。その一部は平成二十四年度

紙に熱中した模様を記している。

13 た絵葉書は 白樺派との直接的な接触は『三島通陽』年譜によれば一九一五年頃であるという。実際、通陽を中心に刊行してい その後、 学習院大学史料館編『絵葉書で読み解く大正時代』 (彩流社、二〇一二年) に収録された。

れている。 もつてゐること、僕に逢ひたがつてゐることを知つた。君はもうそんなになつたかと思つた。そしてまもなく君が下 意に君の叔父さんから手紙をもらつて君が文学をやる気のあること、三光と云ふ雑誌をやつてゐること、僕に厚意を てゐた。それで通陽君とも小さい時から知つてゐる。否小さい時だけ知つてゐると云ふ方が本当だ」、「二三年前に不 た雑誌『三光』には第四巻第一号(一九一五年一月)より表紙を有島生馬の絵が飾り、 |番町の家に来てくれた時、君が大きくなつたのにおどろいた」 (五~七頁) などと記している 通陽が白樺派に傾倒していたことは小説の雰囲気からも歴然であるが、 通陽との関係について、「僕は通陽君の叔父さん〔村井弥吉〕と同窓で、叔父さんと随分親しくし 武者小路実篤は 雑誌 「 白樺 『愛の雫』に寄せ の広告が掲載さ

- る。 差し引きは一円五六銭の赤字となる。寄付金は通陽の両親が一〇円、 え総計三〇円九六銭となる。一方、支出は印刷費が三一円五〇銭、 の損でどうにかなるぜ。」(一二六頁)と記している。会計決算報告を毎月載せることとなった第二巻第六号 例の様に学校食堂で騒きながら弁当を頬張つて居るとOさんが何かの話の続きに「君三光は随分損でしよ」と云ふ。 一三年)によれば、収入は会費が全部で合計三円二〇銭、寄付金が二七円五二銭、 え、それは勿論、 『三光』発行に伴う収支については、三島章道「Oさんと私」(前掲『愛の雫』所収)のなかに「ある日の事である 円五二銭とほとんど不足のほとんどを三島家で補填していたことになり、 会費つたらね印刷代の十分の一も入りはしないのさ。 郵送料が一円二銭で総計三二円五二銭で、 親戚の日高夫妻が一〇円、 しかし幸ひに寄附金があるからね、 到底一般には真似のできないことであ これに郵送料の繰越金二四銭を加 通陽が一円、 半分位 弟通隆
- <u>15</u> 16 クナンバーは学習院大学史料館に所蔵されている。閲覧に際し同館学芸員長佐古美奈子氏の御厚意に感謝申し上げる。 三島章道「三光と自分」(『三光』第六巻第四号、一九一七年) 土方与志 『なすの夜ばなし』(影書房復刻、 一九九八年)二〇三頁 五二~五三頁。 三光 は三島家旧蔵で、 現在
- (17) 土方梅子『土方梅子自伝』(早川書房、一九八六年)四三頁

で『ヴェニスの商人』を、武者小路実篤作『わしも知らない』を与志の木蓮、音楽はすべて近衛秀麿さんの担当で上 前掲『なしの夜ばなし』二〇三~二〇四頁。土方梅子の回想によれば「兄がポーシャ姫に扮し与志のシャイロック

子供の頃の私の感想です。しかし、演出者としての彼は力量があると思いました」という(前掲『土方梅子自伝』四 演しました。私は、もちろん熱心な見物人でした。与志は、演技者としては少しくさみがめだった――というのが

前掲『なしの夜ばなし』二〇四頁

思つて居ます。しかし家庭の都合でもつとのびるかもしれませんが、私は早く行きたく思つて居ます。向ふではたぶ るからもつと涼しくなつてからの方がい、からと云ふ人々のす、めで秋に延しました。たぶん九月中には立ちたいと ました米国留学を愈々今度する事になりました。本統は七八月頃出帆の予定でありましたけれど、紐育は余り暑すぎ のです」(二二頁)とあり、『三光』第六巻第四号 (一九一七年)の「三光と自分」では「小さい時からきまつて居り のうちと云つても来年の中頃でせう。実は今年中に行くことになつて居たのですが、少々都合が出来て延ばしました 第五巻第五号(一九一六年)の「編輯室」欄には「私は実は近いうちにアメリカに留学することになつて居りますそ ん法科をやりますが。側ら文学も研究したいと思ひます。一二年で言葉を稽古してそれから大学に入る考へで、たぶ 「通陽手記」五九頁。通陽の留学話は一九一六年より予定されていたが、実行に到らないままとなっていた。『三光』

21 下「通陽手記」と記す。 | 三島章道「日記より(私—友達会—社会—のことを)」(『TOMODACHI』第一巻第三号、一九二〇年)六〇頁。以

ん四五年位居る心算です。はつきり未だきめてありませんが」(五五頁)と述べている。

22 河竹繁俊『日本演劇全史』(岩波書店、一九五九年)一〇二七~一〇三〇頁

前掲『なすの夜ばなし』二一一頁。秀しげ子については、中田睦美「〈秀しげ子〉のために」ⅠⅡ [『論究日本文学

第六五・六八号、一九九六・九八年〕)。こうした「新しい女」と演劇の関係はあまり知られるところでなく、「通陽

日記」は新たな視角を提供してくれる。

前掲『日本演劇全史』一〇五三頁。

24

- 25 は増淵宗一「高村光太郎とチェレミシノフ女史」「同〈二〉」(『日本女子大学紀要 八四年)を参照 友達座に関わる文化人のなかに、亡命ロシア人のチェレミシノフ女史が含まれているのは興味深い。 文学部』三三·三四、 女史に関して 一九八三年
- (26) 「女優に困つて居る公達の友達座」(『都新聞』一九一九年七月三一日)。

27

「通陽手記」六二頁

- 多くの映画に出演している(『キネマ旬報 薫の引き立てられ新劇座、美術座などで活躍、その後PCLに移り、 中将)と結婚したがほどなく別居、離婚した。女優としては伊藤智子の名で知られる。友達座以後の彼女は、 後も新劇、 た数奇な人生もまた「新しい女」の一つの生き方を示している。 『弥栄とともに **「公達連が組織した『友達座』の女優さん」(『東京朝日新聞』一九一九年九月一三日)。野中花子「友だち座のこと」** 映画での活動が確認できる。彼女の本名は田村智子、陸軍中将田村怡与造の三女で、本間正晴 故三島通陽先生五年祭追憶集』〈私家版〉)一六頁。このとき集まった女優のうち、 日本映画俳優全集女優編』へキネマ旬報社、 成瀬巳喜男監督「妻よ薔薇のやうに」をはじめ 一九八○年〉)。彼女のたどっ 白鳩銀子はその (のち陸軍 小山内
- (29) 「通陽日記」一九一九年八月三一日条。
- (30) 「通陽日記」一九一八年二月四日・八月二〇日条。
- (31) 「通陽手記」六三頁。
- 32 親戚の人たちと交際していると、また以前の華族のお嬢さんになってしまいますからね」と言い聞かせていたという 一例として、与志は梅子に対し女性としての自立を求め、「あなたは三島へ遊びに行ってはいけませんよ。
- (前掲『土方梅子自伝』五五頁)。

- 33 「通陽手記」六六頁。与志は九月二一日にも、「劇場ヲシテ罰セラレルナラ罰セラレル」と発言している
- 記」同日)。
- 34 「通陽手記」六七頁。
- 35 「通陽手記」六七頁
- 36 後は東宮職御用掛として側近をつとめるなどした。通陽とは少年団運動でともに協力しあう人物である。 五女子。二荒は一九二〇年三月には宮内省書記官兼参事官に就任、皇太子(昭和天皇)の欧州御巡遊の随行し、その 伯爵二荒芳徳(一八八六~一九六七)は侯爵伊達宗徳の九男、伯爵二荒芳之の養子となる。妻拡子は能久親王の第
- 37 座の重役などもつとめた。 伯爵柳沢保惠(一八七一~一九三六)は、柳沢統計研究所を設立した統計学者で、第一生命保険社長のほか、有楽
- 38 「通陽手記」六八頁。
- 39 「通陽手記」七三頁。

 $\widehat{40}$

「通陽手記」七三頁。

- $\widehat{41}$ 尾崎宏次編『秋田雨雀日記』第一巻(未来社、一九六五年)一九一九年一〇月一日条。
- $\widehat{42}$ 「通陽手記」七四頁
- 43 三島章道「編輯後記」(『TOMODACHI』第一巻第一号、一九一九年)八二~八三頁。
- 「通陽日記」一九一九年一一月五日~九日。「友達会小品展」(『読売新聞』一九一九年一一月一〇日)。
- クを好んだこともあり、つよい意欲をもって作曲に取り組んだ。山田は「私はお影でしばらくぶりに嬉しい曲を作り 土方与志「上場に就いて」(『TOMODACHI』第一巻第三号)九~一二頁。音楽を担当した山田耕作はメーテルリン

も私も同一の点にあつたと思ひます。それでもあれだけに劇と音楽のしつくりした上演は本場でも容易くは見得られ 上げることが出来ました。これはあらためて私からお礼申し上げなければなりません。演出に際しての不満はあなた 53

と今回の上演を高く評価していた。 を喜ずにをられません」(山田「「タンタヂールの死」と私の音楽」『TOMODACHI』第一巻第三号、七九~八〇頁 ないことだけは憚らずいへます。私は日本の片隅であ、した美しい灯が私共の生きてをる間に一度でも点されたこと

- 46 加藤時次郎 経一 (作家)・仲木貞一 (劇作家)・瀧井孝作 『TOMODACHI』第一巻第三号は (社会運動家) といった錚々たる人物からの観劇評が載っている。 「試演記念特別号」と題し、 (作家)・秋田雨雀 (劇作家)・竹久夢二 (画家)・糸井靖之 (経済学者)・ 宮森麻太郎 (英文学者) · 沖野岩三郎 (作家)・近藤
- 47 加藤時次郎「友達会の試演を観る」(『TOMODACHI』第一巻第三号)九〇頁。
- 48 『秋田雨雀日記』一九一九年一二月五日!
- 49 と絵画的な感想を残している(「「タンタジールの死」評」『TOMODACHI』第一巻第三号、三五頁)。 例えば竹久夢二は白鳩銀子について「Igraina をした人の前から腭の線と横顔が大変美しいと思つて見てゐました」
- 50 チェレミシノフ「「タンタヂールの死」を見て」(『TOMODACHI』第一巻第三号)八七頁
- 51 秋庭太郎『日本新劇史』下巻 (理想社、一九五六年) 三二六頁。
- 52 楽を前奏曲と間奏曲に使い、そのリズムで舞台の流れを統一する演出法をとりました。 を、たしかなものと思いました」(前掲『土方梅子自伝』六〇頁)と述べている。 前掲『なすの夜ばなし』二一四頁。土方梅子は当日の模様について「与志は『タンタジール 私は演出家としての与志の腕 ルの死』 を幕間なしで音
- 54 武者小路実篤「友達座」(『TOMODACHI』第一巻第三号)二八頁

土方与志の演出を中心とした試演への評価については前掲紅野論文を参照

- 55 「友達座問題に就いて」(三島章道『劇芸術小論集』〈文泉堂、一九二一年〉) 一四〇~一四一頁。

本稿は二〇一二年五月二六日に行われた学習院大学史料館の第六七回史料館講座における講演

(付記)

一ある貴公子の肖

像―三島通陽関係文書を手がかりに―」をもとに大幅な加除修正をおこなったものである。本稿の作成にあたっては

一年度鹿島学術振興財団による研究助成の成果の一部である。

三島昌子氏、土方美恵子氏、ならびに学習院大学史料館より便宜を得た。心より感謝申し上げる。なお本稿は二〇一